

## のどかな牧草地に、銀色のトレーラーが大集合。

アメリカ合衆国の中部、ミズーリ州スプリングフィールド郊外の牧草地に、四輪駆動車に牽引されたキャンピングトレーラーが続々と集まってくる。エアストリームという名の通り、流線型のトレーラーは銀色のボディに周囲の景色を映し出し、誇らしげに輝いている。これから、年に一度、エアストリームのオーナー有志が全米から一堂に会するラリー「ワリー・バイアム・キャラバン・クラブ・インターナショナル（WBCCI）」が開催される。

ラリーは、州や地域ごとに分けられた支部のメンバーが、各々キャラバンを組んで会場まで来ることから始まる。連なつてやってきたエアストリームは、広大な会場に整然と並べて停められ、牽引車から離して固定される。ここから、1週間にわたるキャンプ生活がスタートするのだが、会場にはなんと、このラリーのために臨時に電気と水道がひかれ、1700台がキャンプをするための準備が万端に整えられている。毎年交代するというラリーの会長をはじめ、組織運営に携わるスタッフが1年かけて準備をするというが、その甲斐あって、電気と水道が各トレーラーへとつながれる。さらには簡易



左●1930年代に作られた、初期のエアストリーム。現在の流線型とは異なる楕円形のフォルム。中●自転車でエアストリームを引っ張る、創始者のワリー・バイアム。軽量で燃費対策も万全ということを証明するデモンストレーション。右●ワリー・バイアムと彼のエアストリーム。キャラバン隊で出かけた先が書き込んである。

郵便局も特設され、優雅な屋外生活はその幕を開ける。会場が「シルバーステイ」と呼ばれるのは見た目と同時に、その機能にも由来するのだ。

### 飛行機に着想を得たキャンピングトレーラー。

ラリーに冠されるワリー・バイアムとは、エアストリームの考案者の名前だ。1931年に最初のキャンピングトレーラーを作った後、さらに快適な空間作りを目指したバイアムが飛行機に着想を得て、アルミ素材で流線型のボディを作ったことからエアストリームの歴史は始まる。頑丈かつ軽量なこのトレーラーの宣伝を兼ねて、バイアムが友人とヨーロッパや中米を旅したキャラバンが現在のラリーの原点なのだという。

ラリーは毎年、バイアムの誕生日の7月4日をはさんで行われるが、この日はアメリカの独立記念日にもあたり、キャンプは大いに盛り上がる。会期中はキャンプ会場のほか、町のコンベンションセンターを貸し切りにし、フリーマーケットやコンサートなどのイベントも催される。自走式のキャンピングカーと違って、トレーラーはキャンブ地に固定すれば牽引車は自由に動かせるため、参加者は自分のクルマで町の会場まで移動できる。これがトレーラーの利点だ。シニアの夫婦も、四輪駆動車をフンブンいわせて意気軒昂だ。「子供の家に行く時なんか、これ

ならゲストルームがなくても平気なんだ。買い物は普通車で行けるし」もはや、家を引っ張って旅をする感覚だ。最終日、帰り支度をする人に聞けば、西海岸まで帰るといふ。「そうだなあ、自宅まで4日ぐらいかかるかな。まあ、ゆっくり帰るよ」そう言いつつ、銀色のトレーラーは日差しに輝きながら去っていった。



左●ワリー・バイアムのいとこ、デイルさん。バイアムのキャラバン隊でアフリカに行ったこともある。右●「WBCCI」2005の会長を務めたジェイムス・D・ノダウェイさんと奥さん。メンバーからは、プレジデントとファーストレディと呼ばれる。